# かけだしの頃

## 9 今だから話せるゲンバの失敗

20代のころ
現場事務所の前で

林建設株式会社
土木部 係長
**中村 直人**

平成13（2001）年に林建設株式会社に入社。以来、街路築造工事や駐車場、共同溝工事などを経て現職。座右の銘は「意志堅固」。

現場に出だして三年目のことです。ある街築工事で「街渠桝」を設置するときに、ちょっと変わったケースに遭遇したことがあります。この「街渠桝」というのはおわかりになりますか？　道路の路肩に、雨水を集めて下水に落とすための桝があるでしょう。要はその桝を二十ｍピッチくらいで路肩に設置していく工事で、今回の件が起きてしまったわけです。

それまで現場では、写真を撮ったり、あるいは丁張り、測量ぐらいしか任されていなかったのですが、今回の現場ではいよいよ最初から最後まで任されることになって、とても張り切っていました。

工事自体も難しいものはなく、何の問題もなく完成して「これで一丁あがり」のはずだったんです。ところが完成して間もなく、「雨が降ると桝の手前で水が溜まる」というクレームが出て、「エーッ」とビックリさせられました。

どうしてそんなに驚いたかといえば、当たり前の話ですが、施工は図面どおりに行ったわけです。なにせ、こちらは初めてひと通り任された工事ですから、ポイント・ポイントで上司や先輩にも見てもらい、一つひとつを着実に進めた記憶がある。なのに「水が溜まった」なんて言われたんですから、「どうして」と思わずにはいられませんでした。

結局、冷静になって考えてみると、その原因はわかりました。道路の縦勾配を計算に入れずに、平面図からの位置測量だけで桝を設置してしまった。そこに問題があったんですね。

街渠桝というのは、当然ですが、水を集められなければ意味がない。そこで水を集めるためには、測量の結果と平面図や縦断図などと照らし合わせて、結果的に水が集まりやすいところに桝を設ける必要がある。ところが今回の工事では、自分の経験の浅さからか、発注者からもらった図面を信じきってしまった。桝をただ平面図に従って設置しただけで、水が集まりやすいところに桝を置こうという発想に欠けていたわけです。

工事の設計図というのは、あくまで事前の調査に基づいて描かれたものであって、実際の工事の条件を反映しているものではない。場合によっては、桝の設置場所はあくまで機械的に描かれたものでしかないのかもしれない。だから、たとえ発注者からもらった図面であっても、それが現場と合致していないようであれば、そのことについて発注者と協議すべきであって、そこに思い至らなかった自分に、今も忸怩たる思いがあるのです。

この一件は自分にとってもいい経験になりました。どんな工事に対しても、油断なく事前のチェックを行うことによって、ミスが小さなうちにその芽を摘み取るという習慣が身についたのですから。

今も忘れられない思い出のひとつです。